



第38回横浜能「通小町」シテ 梅若恭行

第39回「横浜能」の成功を

会長 新堀豊彦

平成三年十一月九日(土)に開催を決定した第三九回「横浜能」は、別記通り、宝生英照先生の「羽衣」、栗谷新太郎、友枝昭世両先生の「蟬丸」と決定いたしました。(観世、観世流梅若会、金春、金剛各流は仕舞)。

明四年が、当連盟にとって歴史的な第四〇回記念能となりますので、横浜能楽堂落成の前祝いの意味もあり、各流そろいぶみて能を出して頂くつもりですが、そのため、本年の「横浜能」が、谷間におちこまぬよう、宝生、喜多二流のみならず、全流の強力な御支援、御協力を心より御期待申し上げる次第です。

金剛の能

連盟常務理事 金剛流

望月悦夫

金剛流の横浜での演能は近來稀で、横浜の皆様には観賞の機会は少なかつたと思われる。昨年の第三十八回横浜能に金剛流から初めて能が加わり、京都の若宗家・金剛永謹師の「羽衣」が演じられた。横浜能に初参加でもあり、また金剛流独特の羽衣に由緒ある長絹の四代目が新調されたこともあって華やかなこの曲が選ばれたと伺った。

文にもあったように、金剛家と四代に亘って関わり深い上村松園(能を素材とした「舞仕度」「花がたみ」「砧」「序之舞」等を残された高名な日本画家)の嗣子・松篁画伯の筆になるものである。

永謹師の勧める「羽衣」の舞台が進んで「物着」となり、後見座で羽衣(長絹)をつけ、是閑作の増女の面をつけたシテの名乗座で正面に向いて居立った「天人」の姿は、見所も息をのむような美しさを見せた。金地に真白な羽根を広げた鳳凰が画かれた羽衣は、天つ乙女が天上に還るに相応しい、お、らかな舞を引立て、いた。永謹師の舞は、太鼓入りの浮きやかな囃子に乗って、序之舞からキリで幕に舞入るまで、天上に帰り行く天人の喜びを美しく表現し見所にうっとりとした共感を味合わせてくれた。



第38回横浜能「羽衣」 金剛永謹

金剛の能は、繊細な観世、重厚な宝生(との世の評)に比べて幽玄味が足らぬという見方もあるが、素朴な明るさ、派手さが金剛の特色とのこと。桃山風の華麗さが連想され、古くから云われる「舞金剛」の明るい幽玄・派手な幽玄が見所に訴えるところが、今回の「羽衣」でも大きな拍手を受けアンケータでも多くの賛辞を得たものと思われる。

謡曲想い出記

連盟副会長 観世流

高岡幸彦

私が初めてお能を見たのは中学の三年で昭和十一年頃であった。当時は私は謡は何も判らず、父が野沢屋の役員であったので、毎年正月に行われた野沢屋のお得意様御招待のお能を見せてもらったのである。不思議に何も判らないはずであるが初めてのかその時の曲目は「東北」と「鞍馬天狗」で鞍馬天狗のシテが宝生重英師、ワキが先

代の宝生新師であった事、狂言も先代の山本東次郎師であった事をはっきり覚えていた。今にして思うと当時の野沢屋のお能は各流の家元級の方が舞われ大へんレベルが高かったのである。そして仮説舞台で狭かった為か太鼓の音の大きさに只、驚いていたものである。

その後これに味をしめて毎年見せて貰ったが、特に印象に残っているのは昭和十五年頃囃子方がストライキをしてお能が出来なくなり、当時梅若流だけ独自の囃子方を持っていたので演能が出来たが他流は演能が出来ず仕舞、素謡にかえられた。伝統ある能楽界でストライキというのも奇異に感じられたが、その時先代の桜間金太郎師の仕舞「熊坂」は素人目にも立派で舞台が狭く感じられた。今もって忘れられない一駒である。

その後私は神戸の大学に行き弓道部であったが、弓道部の同期の教員が殆ど謡を初めたので、それがきっかけで昭和十七年に大槻門下の宇治正夫師に教えを請うたのが謡を初めた動機である。

当時宇治先生門下では私は全くの劣等生であった。然し当時の神戸の大学の謡曲部(風韻会といった)は大変きびしく、会に出演する時はすべて無本とい

う事できたえられた。最初に覚えさせられたのは「江口」と「邯鄲」であった。とに角初めたばかりの私に「江口」と「邯鄲」を覚えろというのだから無理な話である。しゃにむに覚えたら、お前等は地謡の前列で覚えていても声を出してはいかん、口だけばくばくしてみつともなくならない様にしろというので大へんみじめな感じをもった。しかしその無本教育はその後の私の謡の稽古に非常に役立ったと今では感謝している。その後間もなく昭和十八年の徴兵延期の停止により学徒動員で戦地に赴くことになったが、あの物のない時代に宇治先生の催して下さった風韻会壮行会にはお酒からお赤飯迄あって、又場所も「楠寺」というので今もって忘れられない。その宇治先生も今は亡き人になってしまわれた。

その頃宇治先生はよく神戸の山手の能楽堂で能を舞われ我々は観能に行ったものである。戦前に既に神戸には立派な能楽堂があった。

その能楽堂も戦災で焼失し、今は他の場所に立派に再建されていると聞いた。今能楽堂建設に漸く着手した我が横浜をみると文化面では大きな遅れを感じる次第である。復員して東京の会社に就職

し、会社の謡曲部の講師渋谷政寛師に師事したが、奇しくも渋谷先生も大槻門下で宇治先生の兄弟子であった。九番習い迄渋谷先生に教えて頂いた。その後野沢屋に就任し、田辺先生に師事し二十五年が経った。田辺先生に師事して間もなく横浜能の世話人として横浜能楽連盟の役員となり二十数年を経過した。誠に日時の流れは早いものである。その間昭和四十三年十一月三日に飛鳥田市長より能楽連盟へ横浜文化賞を頂いたのは忘れられない感激であった。

当時の役員で今在任しておられるのは宝生流の田所さんだけになってしまったのは何か淋しい思いがする。横浜能楽連盟については幽玄第一号で各役員さんが詳しく述べられているので割愛する。

宮越賢治翁と海謡会

連盟副会長 喜多流 浦部 毅

私が宮越賢治翁の知遇を得てから五十数年になるがここでは能楽関係の足跡をたどって見よう。

翁は明治三十五年新潟の直江津に生まれ高田中学から東京高等商船を卒えて海上勤務に就き、過ぐる大戦で、輸送船々長

として活躍し戦後は横浜港の水先人となった。翁は趣味も豊富で学生時代から尺八や絵を修めていた。戦後は特に能楽に打ち込み素人としてはその奥義を極めたと云えるであろう。

戦後建てた竹の丸の自宅には能舞台もあつらえるという熱の入れようで、ここに港関係の役所や会社の同好者を集め稽古場としていた。

この集りを海謡会と名付けて昭和三十年春発会を兼ねて発表会を盛大に開催した。これが海謡会第一回例会である。以来春秋二回例会が催され今春は第七十二回目を迎えた。

岡村の宮越舞台が建立されてからは流派を問わず入会を認めたので会員も殖えていった。

昭和の初め久保山の林光寺の住職塚越一山師(勝海舟の高弟で禅や漢学の大家)が禅の修行にふさわしい場所として、緑深い山林に囲まれ湧水ゆたかな岡村の地を選び禅堂を創建した。時うつり、この敷地が翁の所有となり東京音楽学校の由緒ある能舞台を譲り受け移転復元したのが宮越能舞台である。誠に幽玄の世界に浸り楽しめる環境に恵まれ横浜市唯一の能楽の殿堂として多くの人が訪れる事になった。

大東亜戦争に於ける戦歿船員六万余柱の霊を慰めると共に海洋永遠の平和を祈念するため昭和四十六年観音崎に戦歿船員の碑が建立され毎年五月皇太子同妃殿下のご来臨を仰ぎ慰霊祭が行われている。この日に行われる能「海霊」は翁の作、観世流第二十五代宗家元正師の作曲、自らシテを宗家一門の助演により奉納するのが慣例となり翁亡き後も翁の寄付した基金により続けて行われ昨年は浩宮殿下のご臨席のもと観世清和師が奉納した。この慰霊祭は野外で行われるので第一回の時は雨のため出来なかつたところ皇太子のご所望により一ヶ月後東宮御所に於いて皇族方の御前に海霊を披き美智子妃殿下直々のおしぼりと数々のおことばに感激したと聞き及んでいる。この時檜



「連管」宮越翁最後の舞台昭和61年9月28日

の舞台板を新調し、持参して面目をほどこし前代未聞のことと日頃の能楽に対する情熱の成果に繰り返し翁にその話をせがんで余韻美わしく心をたのしくした。

翁は能楽堂を、文子夫人は能衣裳をそれぞれ市に寄贈したことにより共に紺綬褒章を授与されている。

近年薪能が盛になり能楽に対する関心も深くなっているがまだ特別視されている傾向があり大衆化と共にその発展が期されるのではないかと思われる。長い伝統と慣例はその一端が近寄りにくい感じを与えるのかも知れない。翁は能楽界に多大の貢献をなしその普及に努めた方であるが、我々が感銘を受けるのは大らかに共に楽しむという心である。春秋の例会では能、謡、仕舞、囃子等多多彩に精進の成果を披露して楽しい一日を過ごしている。

海謡会員は現在観世流二百二十四名、喜多流七十名、梅若流十六名の二百十名であり、その属する小団体は二十に及んでいる。お互の和を大切に共に楽しみ乍ら能楽の発展を図りたいと大きな希望を抱いている。

(平成三年四月十日記)

横浜梅若連合会のご紹介

横浜梅若連合会
副会長 水野 潔

幽玄第一号を拝見して「横浜能楽連盟」の歴史の古さを知り四十数年間活動を続けて来られた諸先輩のお骨折りに敬意を表します。

私共梅若関係者は、故庄司会長をはじめ堀内・東田・八木下・高橋の皆様が事ある毎に相談をして連盟の活動に協力して参りましたが、これでは他流の方々と比較して非力であると感じました。そこで横浜在住の同好者グループによる組織を作る気運が起こり、梅若会の諸先生のご了解とご賛同を頂き、横浜在住の後藤兼爾先生のご指導で平成元年八月に「横浜梅若連合会」が設立されました。平成二年に会則を制定して堀内会長を中心として十グループの代表が役員となり運営をしております。

次に当会の活動目標を申し上げますと、第一は会員の拡充です。これは横浜能楽連盟への協力です。横浜梅若連合会に入会する為の資格や条件はありませんので、是非お近くの役員へお申し込みください(役員名簿は市の文化事業課にお届けしてあります)。第二は連合会内部の親睦です。能・謡いの社会は縦系

列ですから師匠の意向が役員夫々の意見や行動に反映されます。私達は共通の趣味を持った素人の集りですから「師匠にこだわらない楽しい集団」となるように気楽な謡い会を開いて会員の親睦と発展の為の努力を致します。「幽玄」第一号に竹村さんが「横浜に於いては流派を超えた活動が極く自然にあり自流にこだわらない大らかな風気が特徴である」と記しておられます。当会も連盟の気分に沿う方向に進んで行きたいと存じます。

寄稿の機会を与えられましたので「横浜梅若連合会」についてご紹介を致しました。当会が発足後未だ日が浅く未熟ですがご指導をお願い申し上げます。

近年能面考

岩崎 久人

能が盛況である。能につながる者としては慶賀すべきことだし、その恩恵にあずかっていることを重々感じてはいるが、自戒を含めて、これでいいのかと思うことがある。一億総カルチャー時代を反映して、能面作りを志す人口は、うなぎ登りである。しかし、そうしたクループ展を見るにつけ「能面と似ても非なるもの」の陳列に、肌寒い

思いがしてならない。私は、能面は、能の道具と考えている。しかも、能の演出を左右する重大な構成要素である。だから、能面は舞台で使わなければならない。自作の面が玄人に使われることが喜びであり、舞台上で、シテと面が一騎打ちを演じつつ、一つのドラマを形作っていくのを見るのは、面打ち冥利に尽きると思っ

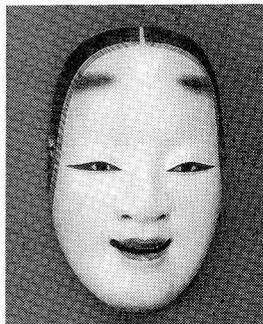
ている。たとえば、同じ小面でも、杜若と江口と松風とは、年齢、身分、に大きな違いがある。さらに演者によっても違いが出るし、同じ演者でも、演出の意図によって、大袈裟に言えば一つとして同じ面でもいいということはない。面を頼まれれば、それらを勘案して、さらに自分なりの一曲の解釈までを込めて、私は面を作っているつもりである。

能の面を作るといふことは、それほどのことと思うから、一にも、二にも、能を数多くみる。おぼつかないながら仕舞や謡も続けている。面打の勉強は、技術もさることながら、能を知ること、鑑みるのではないだろう。鑿の使い方や彩色をいくらか身につけたところで、能を知らなければそれは「面」にはならない。ただのお「面」である。

近年横浜のデパートでの能面展を見ると一面が三〇〇万円近い値をつけている。これは言語道断と言わざるを得ない。面には三種類あると思う。能面に似ているがそこまで行かないのは、お面、似ているのが能面、そして能に使えるのが面だ

と考えている。二番目のものが一番多いようだ。それは「教える側に問題がある」。能を見ない人間が教え、能を見ないで作る弟子を再生産しているからだ。美術品として、壁面を飾る面があってもかまわないが、飾り面であっても、能に対する誤った理解を避けるためにも、本筋は崩したくない。打つ側、観る側、使う側、三者ともに厳しい目を持ちたいと思う。

能面ブームは、能を広く知ってもらうのに良いことに違いない。しかし、種蒔きや裾野作りはもう充分である。これからは、内面を深める時期ではないだろうから。



横浜能楽堂建設 構想委員決まる

横浜市市民局市民文化室は平成三年二月、建設準備中の能楽堂の構想委員会を設置し、次の各先生方に委員を委嘱した。

- | | |
|--------|------------|
| 観世 元昭 | 観世流シテ方 |
| 坂井 音重 | 〃 |
| 塚田光太郎 | 宝生流 |
| 守谷与四己 | 金春流 |
| 田村信一郎 | 金剛流 |
| 友枝 昭世 | 喜多流 |
| 梅若 恭行 | 観世流梅若会 |
| 宝生 閑 | 宝生流ワキ方 |
| 金春惣右衛門 | 金春流囃子方 |
| 大藏弥右衛門 | 大藏流狂言方 |
| 羽田 昶 | 国立文化財研究所 |
| 東條 義敏 | 建設省関東地方建設局 |
| 平田 澄子 | 立教大学教授 |
| 西 和夫 | 神奈川大学教授 |
| 田辺 竹生 | 地元能楽師代表 |
- 以上十五名

超一流のメンバーによる構成なので、日本一の使いやすく見やすい能楽堂が出来上がるのが期待される。もし、能楽堂についてご意見があれば、能楽連盟へお申し出下さい。

横浜能楽連盟 平成3年度活動計画(案)

横浜能楽連盟 平成二年度活動報告

(1)主催事業

- 1.第39回「横浜能」の開催
11月9日(土)関内ホール
能：羽衣(宝生)、蟬丸(喜多)、仕舞等
- 2.第6回、五流合同「横浜謡曲大会」
5月12日(日)久良岐能舞台

(2)後援事業

- 1.久良岐能舞台運営委員会の各種事業への協力
- 2.面友会等の関連団体への後援
- 3.能楽堂建設促進への協力、募金運動のバックアップ等

(3)組織広報活動の強化

- 1.会員増強
- 2.会報の発行(年1~2回)
- (4)第40回「横浜能」への準備(平成4年秋)
- (5)その他

(1)主催事業

- 1.第38回「横浜能」の開催
横浜市、横浜市教育委員会、関内ホール共催
10月6日(土)関内ホール
能：通小町(梅若)・羽衣(金剛)・熊坂(金春)
狂言：萩大名(大蔵)
仕舞：融(宝生)・松風、邯鄲(喜多)・小袖曾我、弱法師(観世)

入場者数：S・509、A・372、B・134

収入総額：7,243,500円

総支出額：6,800,000円

前年度(赤字) 400,000円

2.第5回、五流合同「横浜謡曲大会」

5月20日(日)久良岐能舞台
素謡8番、連吟5番、独調2番、仕舞16番、独吟1番
総出演者数：200名

(2)後援事業

- 1.面友会第9回能面展、他
- 2.久良岐能舞台運営委員会の各種事業への協力
- 3.能楽堂建設促進会への協力

(3)広報活動

- 1.連盟会報第1号「幽玄」を發刊(2,000部)10月6日付
- 2.題字を高秀横浜市長に依頼

(4)その他

平成3年3月31日現在
団体会員 41 企業等7 個人会員201
鳴内 久良岐能舞台館長逝去・弔問(1月20日~21日)

平成3年度予算

平成2年度決算報告

収入の部

収入の部

費 目	金 額
前期繰越金	530,035
入会金・会費	300,000
五流大会会費(各流分担分)	130,000
計	960,035

費 目	金 額
前期繰越金	131,393
入会金・会費	643,000
五流大会費	130,000
祝金、他	15,000
雑収入	9,134
計	928,527

支出の部

支出の部

費 目	金 額
五流大会費	110,000
会報「幽玄」制作、印刷費(年2回)	200,000
總會費	40,000
通信費	10,000
雑費(慶弔費含む)	70,000
予備費	530,035
計	960,035

費 目	金 額
五流大会費 (舞台使用料、番組作成費等)	105,547
会報「幽玄」制作、印刷費	90,640
總會費(平成2、3年度分)	85,205
諸印刷費	41,200
郵送雑費	2,760
雑費(慶弔費を含む)	73,140
次期繰越金	530,035
計	928,527

横浜能楽連盟平成三年度總會報告—四月十二日 於・教育文化センター—

第39回「横浜能」

宝生 羽衣 宝生 英照
喜多 蟬丸 栗谷新太郎
友枝 昭世

日時 平成3年11月9日(土)

午後一時始

場所 関内ホール(馬車道)

前売券 S 五、五〇〇円

A 四、〇〇〇円

B 二、五〇〇円

(前売開始8月)

◎他の各流は仕舞で出演されます。

《編集後記》

おかげさまで『幽玄』二号を出すことになった。古く長い歴史の当連盟でありながら、今まで、こうしたP・R活動が出来なかつたことが、むしろ不思議なぐらいで、はじめてみれば、原稿のご協力も順調に頂き、ほとんど心配がない。大変有難いこととお礼申し上げる。

この勢いで、次号以下、充実したものにしてゆきたい。(S)

横浜能楽連盟連絡先
横浜市港南区丸山台2-29-17
☎八四四-二三三六 新堀方
教育文化センター文化事業課
☎六七-一三七七 松田